

## 内田魯庵文芸批評の研究

——紅葉の作品に関する評を中心に——

吉 田 有美子

### 1 紅葉作品評の実際

魯庵が「山田美妙大人の小説」<sup>(注1)</sup>と題する「夏木立」評で文壇に登場したのは、明治二十一年十月のことであった。それ以来、魯庵は数多くの文芸作品を批評したが、特に明治二十年代前半は、彼の一生を通じて最も旺盛な文芸批評執筆の時期であったといえる。この間に魯庵が行った批評をみると、同時代の小説に関するものだけでも五十六篇<sup>(注2)</sup>、取りあげた作品数は七十篇以上に及んでいるのがわかる。これを視点を變えて作家別に検討すると、紅葉、小波、思案、九華、眉山、柳浪、乙羽など硯友社一派の作品を扱ったものが五十六篇中二十二篇あり、この中でも紅葉を取りあげたものが十二篇と断然多いことに気づくのである。本稿では、魯庵が最も多くその作品を取りあげ、強い関心を示していた紅葉に対する評を中心に、批評の特色や評価の基準について考えてみたいと思う。

まず表(1)であるが、上段に紅葉の作品、下段にそれに対する魯庵の批評を書き出してある。このうち、作品集である『初時雨』と、子供を対象とした『二人援助』『鬼桃太郎』の三篇は、他の作品と同様に扱うわけにはいかないであろうから、ここでは省略することにする。尚、残り九篇の作品に対する魯庵の批評は、各々特色があり、魯庵の批評の視点を探る上で意味があるのであるが、紙面の関係上、特に魯庵の批評の特色を如実に示していると思われる四篇——「京人形」評、『色懺悔』評、『南無阿彌陀佛』評、『戀山賤』評——を中心に考察していきたい。

## (a) 「風流京人形」評

魯庵が紅葉の作品中、最初に批評したのは「風流京人形」である。

この評の中で、魯庵は紅葉の「 $\wedge$ 文辭 $\vee$ 、つまり $\wedge$ 文辭 $\vee$ や修辭について、

紅葉山人の筆は縦横無盡なり。西鶴其韻を玩味せざれば如此き地の文を作る能はず、京傳三馬の神髓を得ざれば斯くまで詞に自在なる能はず。殊に一種の雅俗折衷を以て微細に情致を描寫せし巧妙に到つては獨り硯友社に屹立するのみならず江湖幾多の小説家皆背後に墮若たらざるを得ず、第八回の如きは唯文庫に燦然たるのみならず紛々たる世間の小説雜誌悉く其光を失ふの感あり。

と述べ、紅葉の筆を「縦横無盡」であると認め、「雅俗折衷」の巧妙さを賞賛している。又、「 $\wedge$ 文字 $\vee$ についても、「殆んど間然すべきなし」として、極端に特異な文字を用いているところ、形容の不的確なところを指摘しているにすぎないのである。

ところが、「 $\wedge$ 脚色 $\vee$ に関する批評の部分で、魯庵は、

全篇より評すれば（略）支離滅裂と曰はんより外なし。（略）若し篇々個々として評すれば「京人形」は完美のものなるべけれど——若し字句に議すべきなれば全篇の脚色を問はずと曰へば「京人形」をこそ立派なる小評と云つて可なるべけれど——（略）如何せん首尾貫徹せず派相應せざれば圓滿と云ひがたきを。

或いは、

個々別々に見れば極めて美なりと雖も合同して一篇となせば是を完美なる小説と云ふべからず、否——無遠慮に云へばツジツマ合はぬ極めて不完全なるものと云ふべし。（略）「京人形」の手際は——中にも第六第八兩回の如きは遙に「花車」及「五月鯉」に優れとも肝心なる脚色の一線通徹せざるは此絶妙好辭をして死物たらしむるに似たり。（略）余が「京人形」の作者と紅葉山人の新著に於て惜む處は即ち此一點にあり。

と述べているのである。つまり、「 $\wedge$ 字句 $\vee$ 」 $\wedge$ 文辭 $\vee$ に優れ、部分的に「完美」であつたとしても、「 $\wedge$ 脚色 $\vee$ 」が「一線通徹」していない限り、巧妙な文章もその効を發揮できない、と、「 $\wedge$ 字句 $\vee$ 」のみに注意が払われていることを批判しているのである。

これから考えると、魯庵が小説の要素として重んじていたのは、「 $\wedge$ 字句 $\vee$ 」 $\wedge$ 文辭 $\vee$ よりも「 $\wedge$ 脚色 $\vee$ 」であつたと言えるのではなからうか。このことは、「肝心なる脚色」という表現をしているところからも窺えるし、「 $\wedge$ 脚色 $\vee$ 」が一貫していない理由を多くの紙面を割いて説いていることから推測できる。

又、この評の末に、魯庵は、

「京人形」は號に追はれて作られしと考ふれば評するも野暮。と述べている。「評するも野暮」とは「評するに値しない」と言うのも同然である。とすれば、この一文で魯庵は「京人形」を完全に否定したことになる。先に引用したように、彼は「 $\wedge$ 脚色 $\vee$ 」の「一線通徹せざる」点を挙げて、

余が「京人形」の作者と紅葉山人の新著に於て惜む處は即ち此一點にあり。

と述べていた。然るに、最終的には「評するも野暮」という評価を下しているわけだから、単純に考えると、「脚色の一線通徹せざる」という、ほんの一点が、この作品を「評するも野暮」なものにしてしまったということになる。このような速断が百パーセント許されるわけではないだろう。しかし、少なくとも△脚色▽の一貫性が、魯庵の作品を評価する際の一つの基準であったことを示しているといえよう。

その他、魯庵は△趣向▽が「纏のつかぬもの」であることや、△立案▽が「所謂馬鹿者の極楽」を描こうとした「恐るべ」きものであることにも触れているが、私が特に注意したいと思うのは、冒頭部分での

京人形は美なる哉、艶なる哉、惜むらくは活動の精神に乏し。という指摘である。つまり、この作品が、生き生きとした人間ではなく「京人形」しか描けていないということなのであるが、残念なことには、どのような点が「活動の精神」に乏しいのか、又、何故そのような弊に陥っているのか、という言及を魯庵は全く行っていないのである。なるほど、△脚色▽が一貫しない例として、永代、袖の人物造型の矛盾、二宅や竹田が永代をフルであると知らずに夢中になる不自然さを挙げてはいるが、これは△脚色▽の一貫性という視点から人物を見ているにすぎず、登場人物を如何に生かすか、どのように掘り下げるか、という側からの指摘ではない。「京人形」

の△脚色▽の不手際が目につきすぎたのか、或いは小説に於ける△脚色▽を重要視しすぎたのか、魯庵は「惜むらくは活動の精神に乏し」という発見をつきつめてはいないのである。しかし、小説中に於ける人物のあり方に注目した発言として、この指摘は記憶し得るものだと思う。

#### (b) 『二人比丘尼色懺悔』評

まず、この批評を一読して感じるのは、批評の方法が他の紅葉作品評とは異なっていることである。特にその差異を感じるのは(其一)である。「まづ順々に申さうぞ。表紙は凝つたもの、古代摸様に紺紙金泥は面白し蟲蝕は面白からず。」と書き始めて、扉、序文、自序、本文と頁を追って表現の不的確、挿画の出来具合などについて細々と述べている。たとえば、

二十三頁に「おツしやツては下さりませぬ」とあるは夫に對する詞にて他人に物語るとは思はず。二十六頁に「此上もない弘誓の船」とあるは中々シャレタ文句是が比丘尼の口から出るとは……。二十九頁に「鋸に柄や附けたる」とは不思議、柄のなき鋸はそも何処にやある。

というふうである。

(注3) 最近出版された『内田魯庵集』の解題で稲垣達郎氏は

「色懺悔」は『二人比丘尼色懺悔』、吉岡書店が新企畫の書きおろし創作シリーズの小冊子「新著百種」の第一號である。(略)一種新鮮な企畫として迎えられたらしい。魯庵が外装からはじま

て挿書にも眼をくばっているのも、そういう事情と無關係ではなかったであろう。

と述べている。確かに「新著百種」が当時斬新な企画であり、装丁の面でも注目されていたことは事実であるから稲垣氏の指摘は尤もなものだといわねばならない。

しかし、前に引用したような表現面での仔細にわたる批評を考えあわせた場合、そこにも一つ注意しなければいけないことがある。それは、(其二)にみられる批評の方法そのものが、紅葉の文芸批評の方法と極めて類似しているという点である。

紅葉は明治二十一年、「我樂多文庫」の七、八、九号に美妙の「夏木立」の評を連載したが、これと『色懺悔』評の(其二)の批評の方法及び視点の置きところが非常に似ているのである。紅葉の「夏木立」評は「まづ表紙の繪から申さうぞ」で始まり、「言語は生ぬるい處多し」とか「略」などハ餘程舌ツたるい文句に聞へるこれは武家言語にかいた方がいゝ」とかいう表現に関する細かな評が続き、挿画にも筆を及ぼしている。少しその本文を引用してみよう。

八頁に實にが十ばかり見へるこれ聞苦しいの素天邊なり 意味を強める爲かハ知らねどア、澤山では鼻につく……實に鼻につく(冷かしちや困る) 十三頁「壓ひあす」が口説の條下に(は、無言の所作事だな……いよ妙だ千金の値ひがあるて……なほ煩惱の犬が吼えて来て……)こんな洒落半分な口説方で誰がしたがふものぞ(略)かく申す紅葉が女であったとした處が

(フウ其顔で……アラ凄まじの仰せ) かゝる上ずった……人を冷かすやうな口説方で落るものか(誰が醉興に口説くものか) 頁を追って批評していくところや、( )の中に戯文調の文を入れていくところ——『色懺悔』評では、(紅葉さんお驕りよ)(ナニ：客の比丘尼が讀むまゝ、ダト、扱はドモリ——不使あの容貌にて)等が挙げられる。——はそっくりである。このように魯庵は視点の置き方、批評の叙述の仕方まで、紅葉の方法を借用しているのである。

何故このような方法をとらねばならなかったのだろうか。魯庵は先に取りあげた「京人形」評の中で、

著者が曾て「夏木立」及「眞美人」を評せしを見るに天井の隅の蜘蛛の巢を拂ふが如く徒らに字句の末に拘泥し全豹を執て是を論せず、怪しむべき哉、字句に議すべきなければ完美なる小説と曰って可なる歟。

と述べている。つまり、紅葉の「夏木立」評の態度を完全に否定しているわけである。であるのに何故、この紅葉の方法を用いたのか。ここで考えられるのは、紅葉の作品を批評するのに紅葉の批評方法を用いればどのような結果になるかを紅葉に示そうとしたのではないか、換言すれば、毒をもって毒を制す意図があったのではないか、ということである。この批評によって魯庵は『色懺悔』を批評すると同時に、紅葉の批評方法が如何に瑣末なことに囚われているかを証明しようとしたと言えるだろう。

このような方法を用いた批評は魯庵の二十年代の文芸時評を見て

も殆どない。僅かに「眞美人」を評したものの中に見られる程度である。この評でも魯庵は表現上の問題点を中心に頁を追って述べている。たとえば、

著者は李長吉の惡流と見え古塔、城跡、狐、鬼等を好まるゝ様なるが爰に不思議なるは著者極めて「東」の字を好めり三頁に「此窓から東の方を見ると」とあり十頁に「丁度東の山の上から」とあり三十九頁に「東の空には」とあり四十頁に「東の岸には」とあり六合の中唯の東のみを尊ばるゝは何の故ぞ（以下略）

というふうである。しかし、この「眞美人」評も単なる作品評ではなく、その末尾には、紅葉が「眞美人」を批評して、箱庭には箱庭の風情、奇観があると述べ、その著者九華を指して「清少の才もあり紫の文をかなり綴り」と言ったことに對する正面きつての反論が載せられている。つまり、この「眞美人」評は批評であると同時に、紅葉に對する批判をあからさまに示したものであるわけである。これらのことから考えても、紅葉の批評の方法を用いること自身が、紅葉に對する批判であつたといえるのではなからうか。

(其二)では、方法は魯庵本来のものに戻っている。内容としては、二人の尼が出会うという△趣向▽が陳腐であることや、全体が「ドラマチック、フアクト」であること、詞が「淨瑠璃風」であるのでますます芝居がかった作品になっていること、地の文が少なく詞が沢山で小説としては「頗るダレル氣味」であることを挙げ、

縦令時代小説でも芝居の臭味が有ては困る。種彦や仙果の作つ

た合巻物は、大抵芝居の趣向にて具眼者は常に措て居る、馬琴すらも折々芝居じみた事を挿むで折角の苦心を大なしにした。それ此新文學界に生れて其缺點を襲うとは何事です紅葉さんと小説と芝居とは區別すべきことを述べている。同様の指摘は、「お八重の評拾遺」に「小説は芝居と離るゝこそよき」という表現で示されている。

これに對して鷗外は「明治二十二年批評家の詩眼」(注6)の中で、諸家は或は單稗の本性に自ら戯曲に似たる所あり又た勢、戯曲に似ざるも能はざる所あるを忘れしにはあらざるか

と、戯曲と小説が無縁でないことを説いている。そして、戯曲と小説を切り離して考えている例として、魯庵の『色懺悔』評に於ける見解を引いているのであるが、少し解釈が違うのではないかと思う。『文學一斑』(注7)で示されている「戯曲」とは必ずしも一致しないのではなからうか。この問題に関しては、別の機会に詳しく論じたいと思う。

その他、表現面に於ては……とーの使用が多すぎることに、△文章▽が「一種妙」で「氣韻」が全く無く、悪く言うに「極彩色の風繪」であること、又、△脚色▽の面では、少し欠点はあるが「京人形」と違つて「全篇通徹」していることを挙げている。

以上述べた事柄は、勿論魯庵が小説をどう考えていたかを知る手がかりとなり得るが、次の、

小説を編にはキャラクターこそ肝心なり。此「色懺悔」には何

れも此肝心なるキャラクターを斂きしと覺ゆ、遠山左近之助を除くの外は芳野も若葉も殆んど區別に苦しむ、諸共に畫美人—京人形にしてトント活きた處なし。

という指摘には、もっと明白に彼の文學觀が打ちだされている。「京人形」評でも「活動の精神に乏し」と言った魯庵であったが、この『色懺悔』評に於て、人物に對する追求の目が更に深められているのに気づくのである。

又、『色懺悔』評で留意すべきなのは、魯庵独特の諷刺、批判の表現が多分に含まれているという点である。これは「山田美妙大人の小説」で既に感じられたことであるが、紅葉の作品を扱ったものの中では、この『色懺悔』評が最初であろう。言うまでもなく紅葉の批評の方法を用いるという發想自体が魯庵的であるが、表現の中にも彼の諧謔の精神は、

・「書…書置…の事」とは中氣病者ちゆうきびやうの手紙か、書損じて二度までも重ねしなるか—覺束なし（ナニ…客の比丘尼が讀むまゝダト、扱はドモリー不便あの容貌にて。）

・六十六頁に「お…お…お…お情ない」トハを…を…を…をかし。

・如何に進まぬ祝言とは云へ「針の床」とは情なし「鬼と添寐とは心強し。

といった具合に現れているのである。二つめに引用した文は、紅葉を初め硯友社一派がよく用いた…の使用に對する諷刺であるが、魯庵と同時代の文芸批評家、石橋忍月もこの…の使い方について次の

ように述べている。(注8)

言葉の斷續多きに過ぎて讀者をして奇異の懷ひあらしむること、例えば「あ…あ…有りがたし、お…お…お情けない、む…む…無念、く…く…口惜い、う…う…討死」等なり。

これと魯庵の表現とを比べると、真面目一方の忍月の文より、魯庵の諷刺の方が如何にユーモアに満ち、強烈な印象を残すものであるかが判るだろう。又、原文では「お…お…お情ない」となっているところを、一度多く「お」を加えているのも魯庵の諷刺のセンスをよく表しているといえる。紅葉の批評方法を借用するだけでは飽き足らず、その上にこのような諷刺、諧謔の表現を積み重ねているのである。まさしく『文學者となる法』(注9)に通じる精神がここにあるようである。

最後にもう一つ考えたいことがある。それは、紅葉の序と魯庵の評価の関連についてである。紅葉は自序に、「一風異様の文牀を創造せり」と述べ、「對話は淨瑠璃牀に今時の俗話調を混じたるものなり。惟みるに、これを以て時代小説の談話牀にせんと作者の野心」と書いている。では、魯庵はこれをどのように評しているか。

「文章は一種妙です。京人形とは又一風變つて妙だ」或いは、「全牀此本は凡てドラマチック、ファクトにして小説としては無理—その上に詞を淨瑠璃風にせられし故丸で芝居かと思ふ處あり」と述べている。この魯庵の評をつきあわせると、紅葉が自序に示したねらいというものは、作者の意図どおり作品の中に現れているということになる。しかし、魯庵は、それが作者の意図どおり作品化されて

いたにも関わらず否定しているのである。つまり、この否定は単なる作品に対しての否定ではなく、作者のねらい自身が小説に求めるべきものではない、という紅葉の創作姿勢に対する根本的な否定であったと言ふことなのである。この意味で、自序と作品、そして批評という三者の関係を捉えることも、魯庵の紅葉批評のあり方を知る一つの糸口ではないかと思ふ。

(c) 「南無阿彌陀佛」評

この評は、方法という点では、「京人形」評と殆ど同じであると云つてよいだろう。作品の全体的評価に始まり、その長所を説き、矛盾点を挙げるという順序で批評が為されているのである。

最初に魯庵は紅葉の作品に対して、「我が喜び且服する處は立案にあらずして寧ろ文章にあり。」と述べているが、

唯「百花園」中の南無阿彌陀佛に於て立案の最も奇絶なるを見る。

とこの作品が、常の作品とは異なっていることを指摘している。続けて魯庵は言ふ。

山人は西鶴其碩を喜び常に是を誦讀すると聞く、故に其作の如き立案に力を用ざるにあらずれども往々文字に使用さるゝの傾向あり。京人形或は色懺悔に於て見るも脚色は文字の爲に作られ文字脚色の爲に動かざるを知るべし。然るに此南無阿彌陀佛は大に固有の病癖を免かれたるに似たれば此一點を以てもまづ山人を稱揚して可なり。

ここに「固有の病癖」という言葉がある。右の文章から考えて、紅葉「固有の病癖」と魯庵が捉えていたのは、△立案▽に力を入れず△文字▽に左右されることであり、△文字▽の爲に△脚色▽が作られ、△脚色▽を生かす爲に△文字▽が用いられないことであつた、と言へそうである。これらを「病癖」と呼んでいるところからも、魯庵が、△文字▽だけが先走つて△立案▽△脚色▽が疎かになることを危惧していたことが判るし、△立案▽△脚色▽というものが小説の要素として重要であると考えていたことも推測できるのである。そして、魯庵は「南無阿彌陀佛」を、この「病癖」を免れた作品として捉え、評価しようとしていたといえる。

次に魯庵は、この作品の長所として、

一、「表面上の艶又哀」に過ぎない△文字▽を羅列せず、「平俗の文字を使用せし事。」

二、「讀者には少しも解らざる文句」「役にも立ぬ駄洒落或は樂屋落」を並べる「游戲半分」の△文字▽を用いず、「眞摯」な△文字▽を用いた事。

三、「人物を顯出する僅少なりし事。」

四、「大阪言葉を用ひざる事。」

の四点を挙げ、「我が推奨する所以」であると述べている。ここで注意したいのは、三を除く三点が全て表現に関する事柄であることである。これは「立案の最も奇絶」した作品、という最初に示した評価と矛盾するよう思われる。というのは、魯庵が本当に小説の要素としての△立案▽△脚色▽を重んじてこの作品を「推奨」した

のであるなら、当然その長所としての「立案」を「脚色」について指摘があるはずである。しかし、ここでは殆ど見られないといつていい。三番めに挙げた「人物を顯出する僅少なりし事」が僅かに「立案」に含まれる点かと思われる程度である。どう考えてもこの一点だけで、この作品を「立案の最も奇統」した作品と賞賛することは無理である。確かに、ここに挙げた一、二の事柄は、紅葉が平素陥りやすかった表面的な「文字」の羅列という「病癖」を免れていることを指摘してはいる。けれど、それを一歩進めて「立案」を「脚色」を賞賛する根拠として位置づけてはいけないのである。つまり、魯庵が「推獎する所以」として挙げた四点は、どう好意的に解釈したとしても「立案の最も奇統」したという評価には結びつかないということである。

これは、表現が「病癖」を免れているということが即、「立案」の「奇統」に結びつくことと安直に判断したことを物語っている。魯庵の指摘する「立案」のすばらしさは、表現がいつもの弊に陥っていないという、間接的で消極的な根拠に基づくものではないのである。このことは「南無阿彌陀佛」評の言及の不完全さを示すものと言わねばならない。

しかし、魯庵の関心がどこにあったか、ということに視点を置いた場合、彼が指摘した四つの長所はまた別の意味を持って来る。先にも述べたように、魯庵はこの作品の「推獎する所以」を殆ど表現面に見出している。「京人形」評でも「文辭」と「脚色」の關係について触れていたが、魯庵は紅葉の文章表現に、かなり関心を持っ

ていたといえそうである。このことは、「京人形」「南無阿彌陀佛」評を初めとする紅葉作品の批評以外にも、紅葉の文体や表現のあり方をとりあげたものが比較的多いことから想像できる。

たとえば、明治二十二年十二月に「女學雜誌」に発表された「才子文」<sup>(注10)</sup>の中では、

紅葉先生の文は自在圓満にして奇句警語に富む、唯折々は殊更に才を弄して妙を損するの憾あり、例へば大通が興に乗じて曉舌るが如し。

と書いている。

又、同月の「今の小説界文派」<sup>(注11)</sup>では、当時の小説を文体によって「言文一致派」「元録派」「合巻派」「西洋翻譯派」「雜派」の五派に分け、紅葉を次のように分類している。

元祿派を細別して二とす、即ち左の如し

(甲)西鶴派

此派を奉ずる人近頃や、多くなれり。

先達は愛鶴軒紅葉露伴の三氏なり。

(乙)其碩派 (以下略)

同様に、「文學上の流行」<sup>(注12)</sup>では、

さて今の流行はナアニ、西鶴宗、露伴子も紅葉山人も竹の

屋の老隱居もみんな其御弟子にて歸依の信者頗る多し。是れは

佛家の禪門と全しく沙彌から長老になる事出来ねば世間一切の

衆生輕々しく此門に迷ふて鉄如意を食はされ目の上の瘤を貰ふ

勿れ。



と言っている。その他、紅葉が「西鶴派」であることは、「饗庭篁村先生の文章」<sup>(注13)</sup>の中でも触れている。

又、明治二十三年十一月、「國民新聞」に載せた「外形論者」<sup>(注14)</sup>では、

美妙が聲名を擅にして紅葉が遠に超越せしも世人は唯其文牀の目新らしきに眩惑して讚嘆せしのみ。さる故に少しく月を經過すれば忽ちに倦厭を生じ、一時は無二に珍重せしも一度眼馴れし曉には彈指して是を退く。讚嘆激賞する事極はめて輕卒にして排撃痛罵する事も又頗る輕卒なりと云ふべし。是れ何故ぞ。外形に依て文を判ずるが故のみ。

と、美妙や紅葉の文が「外形」によってのみ世人に受け入れられていることを指摘している。

その他、明治二十二年十一月の「文學上の符號」<sup>(注15)</sup>では、紅葉初め硯友社員が頻繁に用いた「や」の符号の効果をあげていゝし、二十三年二月の「名家の苦心」<sup>(注16)</sup>に戯文調に描かれている小説家の姿は、氏名を挙げていないので断言はできないが、その推敲の様子からして、恐らくは紅葉、或いはその周辺の者だろうと思われる。

これらは皆、紅葉の文体や作風など、表現のあり方について述べたものである。これから考えても魯庵が紅葉の文章に特に関心を持っていたことは明らかであろう。

魯庵は、冒頭にも挙げたように、「我が喜び且服する處は立案にあらずして寧ろ文章にあり」と、常日頃から紅葉が文辞の才に富み、西鶴調の文を練るだけの力を持っていることは認めていたらし

い。それにも関わらず、△文字▽のみに力を入れすぎて全体としての作品が拙くなりがちである点を、紅葉の一大短所だと思っていたようである。批評する際に、その短所への言及が主になってしまったとしても強ち責めるべきことではないかもしれない。そういう意味で、この長所四点は「立案の最も奇絶なる」作品だという評価の根拠と直接には結びつかないが、魯庵の紅葉の表現に対する関心の強さをみるにはよい例だと思われる。

次に魯庵は、登場人物の矛盾が折角の作品を損っている例として、乳母が明日をも知れぬ病人を残して東京に去らねばならない必然性がなく、乳母の人物像に矛盾がある点、手紙の内容が如何に親切であっても顔も知らない兼次郎をお梅が恋慕するのは余りにも輕卒である点、由之助が第一回ではあどけない少年であるのに、第四回では指輪の届け先を兼次郎だと悟る大人びた人物に描かれている点の三つを挙げている。又、お梅が死ぬ實際に手紙が届くあたりの△趣向▽の無き、聞き手語り手の関係が一貫していないことを指摘している。

これらは皆、的を得ていて魯庵の批評眼を物語るものであるが、ここで留意すべきなのは、人物造型が作品全体に及ぼす影響の大きさをはっきりと自覚して批評しているということである。魯庵が小説に於て、人物を重要視していたことを示唆する一例であろう。

#### (d) 「戀山賤」評

この批評も、方法は「京人形」「南無阿彌陀佛」評とよく似てい

る。初めに全体の評価を述べ、続いて秀れている点についての言及があり、表現上の不適切を指摘して終わっている。

前半の内容を追っていくと、魯庵はかなり「戀山賤」を認めていた、と考えてよさそうである。というのは、「近日出色の立案」と「賞賛」し、「其着眼の高きに服し」ているからである。又、この作品を「ゾーラの『ア・ベ・ムール』に胚胎」した「人情の微を穿ちし」ものであると捉えている。その中から、 $\wedge$ 着眼 $\vee$ の高き、 $\wedge$ 立案 $\vee$ のすばらしさを述べたところを一部引用してみよう。

西鶴の文はねぢりたる白銀の如かひねりたる厄神の如きか、余は更に曰はず。何となれば「戀山賤」の妙は文章にあらず着眼にあればなり。もし文章をもて云へば「戀山賤」は「色懺悔」「京人形」に續ぐの拙悪文字なればなり。唯其重んずべき所以は實に着眼最も高くして人間の胸奥に善惡共に存するを觀破せしにあり。春の屋主人の「書生氣質」以來群小説家も出でたり群小説も出でたり。世態の微を穿ちしもの少なきにあらねどよ人人間醜惡の隠るゝを寫せしもの幾類かある。「戀山賤」は獨り紅葉作中の第一のみか、明治文界——恐らく文化文政の盛時にも求むべからざる立案なり。文章は讚賞するに足らねど着眼の高きは敬服すべし。

魯庵にしては褒めすぎの感がある。

それはともかくとして、ここで注意すべきなのは、この評価を下すにあたって魯庵が示している文学観である。いや、文学観と呼ぶほど大袈裟なものではないかもしれないが、少なくとも魯庵の文学

についての意識をあらわしたものだと思う。

まず $\wedge$ 着眼 $\vee$ の高低の基準について魯庵は、

天地の大元より余の喜ぶ處なり、自然の美元より余の愛する處なり。さりとて天地の大と自然の美に眩まされて人情の微を穿ちしをもて是より低き着眼となすは豈余の能ふ處ならんや。

と述べている。つまり、 $\wedge$ 着眼 $\vee$ という視点に立って $\wedge$ 人情の微 $\vee$ を穿つということを見た場合、それは決して「天地の大」「自然の美」を取りあげたものに劣ることはない、ということである。換言すれば、 $\wedge$ 人情の微 $\vee$ を穿つということに $\wedge$ 着眼 $\vee$ の高きを認め、小説としての価値を見出していたと言えよう。この考え方には、後の『文學一斑』の文学の定義に通じるものがあるし、表面的な文章の美しさに終始しがちであった硯友社文学を批判する際の、基準となった意識が感じられるようである。

続けて魯庵は、一般の文学の評価が「形の大なるに驚きて更に質の精なるに留心せざる」点を嘆き、「徒らに奇巧を弄した」実質を伴わない作品をも「外形に眩惑せられて只管賞賛し、苟くも事小なれば縦令極粹に徹するも退けて第二となす」ことの誤りを指摘している。大著であれば即ち佳作であるとうけとり、たとえそれが「結構の大なる」作品を徒らに模倣したものであったとしても賞美する、という価値の置き方に魯庵は大きな疑問を抱いているのである。彼にとつて、その作品が長編であるか短編であるかという「形」の大小は、必ずしも評価の基準ではなかったわけである。

又、先にも挙げたように、魯庵は「戀山賤」をゾラの「ア・ベ・ム

「ル」に萌したものだと言っているが、その際にゾラの文学の特色について述べている。それを纏めると、ゾラは「下賤なる情慾の微を寫し人間心理の醜惡を暴露」する為、一部の論者から「不道德不純潔」というレッテルを貼られている。しかし、人間も一皮破れば醜いものであり、「人情の微を寫さんにかでか醜惡を除き去る」ことが出来ようか。今の世が楽園のようであれば人々を「清淨無垢」に描けばよいが、「不純潔」に流れている今の世に於て、どうして「楽園の小説」を望めようか。ということになる。魯庵が「夏木立」を評した中にも、

大人よ願くはエミルゾラの如きリアリストとなつて「ナ、」  
「ラブ、エピソード」の如き純好小説を綴れ。

とゾラに小説の理想を見ているところがあるようだが、この「戀山賤」評でも「人情の微を穿つ」という点でゾラを評価していることが窺えるであらう。森鷗外が、

想ふに不知庵の意は近代實際派の小説中にて精緻を極めたる心理的摩寫を望むに在らむ  
或いは、

不知庵は詩の概念に於て理想派に屬すれども小説に對しては實際的趣味に乏しからざるに似たり

と述べたのも、魯庵のこうした文学觀を捉えたものと思われる。

又、この作品の文章に関して、魯庵は「拙惡文字」だと評し、「文章は更に妙なし」と述べているが、その後、

小説は文章をもて第一の目的となすものならざれば文章に妙な

きも咎むるに足らず。

と付け加えている。今まで取りあげた評の中でも、文章の表現を最重要としないことを示唆するものは多かつたが、ここでは、魯庵が小説に於ける「文章」の位置をどう捉えていたかが明白に打ち出されているのである。

以上、魯庵の「戀山賤」の評価と、その基礎となった文学意識を見て来たわけであるが、この評を考える際に忘れてはならない問題がもう一つある。それは、この作品の「立案」が西鶴の「義理物語巻六」「表向は夫婦の中垣」と類似しているという指摘が、評の後半で為されていることである。先にも述べたように、魯庵はこの作品を「近日出色の立案」「紅葉作中の第一のみか明治文界」恐らく文化文政の盛時にも求むべからざる立案」「着眼最も高くして（以下略）」と絶賛し、この作品を賞賛する所以は「立案」が「着眼」にあると述べている。ところが、その「立案」が「着眼」は、二百年も以前に西鶴によって作品化されていたと言っているのである。これは一体どういうことなのか。

しかも、単に類似していると言うだけではなく、「着眼」の高さという点で、西鶴の方が紅葉よりも優れているという判定を下しているのである。その理由として、武士と山賤という相違はあるにせよ、「義理物語」では「いかにしても道をそむけり扱も浅ましき心底かなと我と惡心醜がへして」と、男が自らの罪を悟り、良心を取り戻すのに比べ、「戀山賤」では、

（前略）もしや我せしいたづらを知りて告口されたらば卯平命

の手前……それよりは第一に濟まぬは旦那様

と、山賤は人の目を氣にかけ、自分の今後の身の振り方を心配するだけで煩惱心を捨て去っていない点を挙げてゐる。この評価の視点は、「人間の胸奥に善惡共に存するを觀破」しているか否かに置かれており、魯庵が人間というものを「善惡」の共存として捉えていたことを示している。そして魯庵は、

紅葉山人の立案はゾーラに出で、不思議に西鶴と暗合せしなるが、未だ西鶴の着眼更に高かりしに及ばず。

と今までの言及を纏めてゐるのである。

何の為に魯庵はこのよさうな指摘を行なつたのか。「戀山賤」の△立案▽△着眼▽が西鶴と類似し、西鶴より劣つてゐると指摘することにどんな意味があつたのだろうか。

まず一つ考えられるのは、より出来のいい作品を示して、<sup>(紅葉に)</sup>一層の努力を期待したということである。つまり、一つの警告として、魯庵自身が江戸の作家の中で最も認めていた西鶴を引き合ひに出した、という捉え方である。この捉え方をするなら、「戀山賤」に対する評価は、前半に述べられてゐるまま、肯定してよいということになる。

しかし、逆の考え方も成り立つのではないか。前半に於て述べられていた△立案▽△着眼▽への賛辞が、西鶴と類似しているという指摘によって、逆の意味あいを帯びて来るのは否めないことである。「近日出色の」とか「紅葉作中第一のみか、明治文界——恐らく文化文政の盛時にも求むべからざる」とかいうような形容を用い

て、大いに褒めていただけに、この指摘は一つのどんでん返しのように受け取れる。褒めるだけ褒めて後で突き落とすといった、否定の強調法のようにも思えるのである。又、魯庵は先ほど引用したように、「紅葉の立案はゾーラに出で、不思議に西鶴に暗合せし」と言っているが、「不思議に」という言葉を強めて読めば、前半で高く評価した△立案▽△着眼▽は西鶴の二番煎じじゃないかと皮肉つてゐるようにも取れる。つまり、西鶴との類似についての指摘は前半の賛辞を否定する要素を多分に含んでいるということである。従つて、この部分の解釈の仕方が、この評をとりあげる際の重要な鍵である、と言つても過言ではないのである。

しかし、この作品評だけを手がかりに、魯庵が「戀山賤」を評価していたか否かを断定することは極めて難しい。判断する者がどちらの立場を強調するかによつて、魯庵の意図が歪められる危険性もある。そこで、この作品に関しては、この評以外のものに評価の手がかりを求めたいと思つた。

まず一つに、『初時雨』評がある。『初時雨』は前にも述べたやうに作品集であるが、この中に「戀山賤」も収められてゐる。その評によると唯一言、「云ふも野暮……壓巻。」とある。『初時雨』には他に、「駿馬骨」「江戸水」「口惜しきもの」「文盲手引草」が含まれてゐるが、この中では最も評価していたやうである。

二つめに「此ぬし」評がある。この中で魯庵は、  
曾て大人の戀山賤を拜見せしときよくも西鶴の骨髓を得られしものかなと窃に敬服仕候ひしが（以下略）

と述べている。これを見ると魯庵は「戀山賤」をある程度認めていたのではないかと推測できる。

又、「戀山賤」評をもつ一度点検すると、「西鶴の着眼更に高かりしに及ばず」と「更に」という表現を用いていることや、西鶴との類似を指摘した後にも「立案は紅葉作中の第一なれど」と立案の高さを認めるような記述を行っていることなどが見出された。これらはこじつけかもしれないが、この作品を魯庵が肯定的に見ていた一つの手がかりとも考えられるのではないかと思う。

西鶴と類似しているという指摘の解釈には、まだまだ問題があるが、ここでは一応「戀山賤」を魯庵が肯定したと捉えることにしたいと思う。しかし、紅葉への批判が、この評の中に全くなかったというのではない。あくまで他の紅葉作品と比較した場合、肯定的な評価を下しているというにすぎないのである。

## 2 魯庵の紅葉作品評の特色及び評価の基準

以上、紅葉の作品に対する魯庵の批評四篇を見てきたわけであるが、次にこれらの批評に共通して現れている特色について考えてみたいと思う。本稿では都合上四篇のみを取りあげたが、ここでは他の紅葉作品評（作品集『初時雨』と児童文学二篇に関する評は除く。）を考慮しながら論を進めることにする。

まず、魯庵の批評の方法について考えたい。九篇の紅葉評のうち特殊であるのは、『色懺悔』評（其一）と「拈華微笑」評である。

前者は先に述べたように紅葉の批評法を借用したものであるし、後者は作品そのものよりも魯庵の抱いていた「ユーモア論」を展開することに主眼が置かれているからである。

しかし、この二篇を除いた他の批評ではほぼ同一に近い方法が用いられている。これは魯庵が一定の視点から作品を批評している為ではないかと思われる。勿論、魯庵は既定概念に拠ってではなく、個々の場合に応じた柔軟な批評を行っている。それでも方法の上で類似点が出て来るのは、その根底に一貫した文学観、文学意識があったからに違いない。批評家が作品を批評するということは、言うまでもなくその作品の価値の判断することであるが、逆に言えば、その作品評を通して自分の抱いている文学観、文学意識を表出することでもある。自らの抱いている文学観を抜きにしては作品評は行えない。と考えると、紅葉評の方法の類似は魯庵の文学観、又は小説に対する評価の基準がある程度定まっていたことを示すものだと言ってよいだろう。

このことは各評のキーワードを見れば明白である。「京人形」評では△字句▽△脚色▽△趣向▽△立案▽、『色懺悔』評（其二）では△趣向▽△キャラクター▽、『南無阿彌陀佛』評では△文章▽△立案▽△脚色▽△人情▽、『やまと昭君』では△趣向▽△文字▽△主眼▽、『戀山賤』評では△立案▽△着眼▽△人情▽△結構▽、『此ぬし』評では△眼目▽△趣向▽△着眼▽△観察▽△キャラクター▽△人情▽、『伽羅枕』評では△文字▽△人情▽等の言葉が用いられている。これらは魯庵の視点が△文字（文辭）▽△立案▽△脚

色 $\sqrt{\wedge}$ 趣向 $\sqrt{\wedge}$ 着眼(眼目、主眼) $\sqrt{\wedge}$ キャラクター(人情) $\sqrt{\wedge}$ 等に置かれていたことを物語るものである。つまり、各評少々のバラつきはあるが、ほぼ一定の視点から評価されていたということである。これは批評方法を捉える上で重要な点であろう。

従って、魯庵の批評方法の特色として第一に言えることは、各々の評を柔軟に評している、その根底に一貫した評価の視点があるということである。方法上の類似は単なる偶然ではなく、視点—つまり文学意識、文学観の表出とも言えるのだが—が一定していたことに拠るのである。

方法の特色の第二として、諧謔・諷刺の要素を多く含ませることが挙げられよう。これは表現の問題として捉えることもできるが、あえて方法の特色に数えようとするのは、皮肉のたっぷり効いた文章の使い方に魯庵独自の工夫を感じるからである。

九篇の評の中で、特に魯庵独特の諷刺が見られるのは『色懺悔』評(其一)と『やまと昭君』評である。『色懺悔』評に於て紅葉の方法を借用すること自身が諷刺であったことは既に述べたが、表現面でも、

・ 江湖の明盲目を教へらるゝ、御深切の有難き思はず涙を催し候  
(こゝらが主眼のある處か)

・ 芳野が紙帳の書置を見てハテと首を傾けしのみか若葉の物語を聞きても氣が附かぬとは頗る迂濶だ…守眞に嫌はれるも無理はない、「娘芳野は知る通りの不束者」とはサスが遠山——子を見る事親に如かずトハ確言、

等を挙げる事ができる。『やまと昭君』評でも、

世に出でぬ先より御噂は聞き候ひしがシヨールボン子ツツの今様振の中へ異様の物數寄に紫の組にて留めたる大振袖の御姿を拜し參らせては見へぬ御光に尊く覺へ山々思ふ百分一をは書きつらね申すべし。

というあたりがそうであろう。

これらを見ても判ることだが、魯庵の諷刺は対象を的確に把握するところから始まっている。『色懺悔』が「涙を主眼」とした小説だという前提がなければ、最初に挙げたような諷刺は出て来ない。

又、芳野の迂濶さが不自然であることを指摘する際にも、突拍子もない一人よがりの諷刺ではなく、本文中に於ける守眞との関係や遠山の言葉をつましく用いている。同様に『やまと昭君』についても、本文にある娘の描写をふまえ、<sup>(注18)</sup>「文庫」の他の作品が現代風であるのと対比させて諷刺している。

このように作品の本文や特徴を把握した上での諷刺であるから、作品評の中に含まれても異和感を抱かせないのである。それはかりか逆に、指摘に鋭さを加え、説得力を増す結果となっている。このことは、『色懺悔』評のところでも述べた忍月との比較を見ても明らかである。

その他の評にも、『色懺悔』『やまと昭君』両評と同様のことが言える。この二篇ほど明白に現れているわけではないが、ちょっとした言葉遣いに魯庵の諷刺のニュアンスが窺える。たとえば、「京人形」評中に、

・「黒ひ顔は其まゝ柱を離れず」とあり。如何に汐に焼けたればとて亞非利加の土蠻らしく餘りに情けなし

・「火のやうに焚へたつ唇が自ら密着：接吻アーツ」とあるはあられもなし。猫の戀を咏みて破門せられし人もあるに、是はまたいかな事。

とある。「亞非利加の土蠻」に譬え、「猫の戀を咏みて破門せられし人」をひきあいに出すことで、自分の訴えようとしていたことを強調する効果を挙げている一例であらう。

紅葉以外の作品評でも、このような種類の諷刺の方法はよく目につく。参考までに挙げてみると、「妹背貞」<sup>(注19)</sup>評に於ける：「やゝの用い方に対する諷刺」「初紅葉」<sup>(注20)</sup>評での報知新聞の甘い評価に対する皮肉や「南無輕快淡泊」とその作風を呼んでいるところ、「眞美人」評で「趣向」の単調さを擬態語を用いて述べた部分などがある。これらを見ても作品の弱点を掴み、自分の意図を的確に訴える為に諧謔に富んだ独特の諷刺を行っていることが判る。魯庵にとって諧謔、諷刺というものは、まさしく一つの自己表出の手段であり、有効な批評の方法であったのである。

魯庵の批評方法の特色として第三に挙げられるのは、評価つまり肯定か否定かの示し方である。

これについては「戀山賤」評が最もその特徴を示していると言えよう。というのは、先にも述べたとおり、前半の評価を覆す要素を含んだ指摘を後に行うという、その典型的な例が「戀山賤」評にあるからである。

その他の紅葉作品評の中にも、「戀山賤」評ほど重大な問題は含んでいないが、同様の方法が用いられている。

たとえば「京人形」評に於ても、「雅俗折衷」の文章を賛美したその後に、「脚色の一線通徹せざるは此絶妙好辭をして死物たらしむる」とその文章のよさが發揮されていないことを指摘している。

いくら「絶妙好辭」であったとしても、それが作品に生きていないのでは作品全体として見た場合、殆ど無意味だと言うのである。魯庵は紅葉の文体が秀れていることを強調すると共に、その「脚色」の不備をも力説しているのである。そして、それは又、少なからず紅葉の「文辭」のあり方に対する諷刺にもなっているのである。

又、「伽羅枕」評にも、同様に、西鶴調の文章のことが取りあげられている。魯庵はこの評の冒頭に近い部分で、

紅葉は文に巧みなり、その西鶴に得たる處もまた文字にして  
(略) 西鶴より出で、西鶴より能文なりと云ふべし

と述べ、その文の巧みさを賞賛している。ところが、中ほどには「紅葉山人が得しは西鶴の想臆にあらで西鶴の文なり」と完全な賛美ではなくなっている。そして、「一代女」と「伽羅枕」を比較し、似ているのは「一人の女が生涯の歴史を寫せし其形」のみであり、前者が「人情の移り變るを骨」としており、「讀了って恰も麥隴菜野の間を過ぎあたりの景色ながめくらし佛龕に入りて香を拈るの心地す」るのに対して、後者は「奇なるを骨」としており、「眼鏡の忽ちに觀を異にせるが如き」であると述べている。つまり、初めの賛辭は末節に於ては賛辭ではなく、單なる芸達者への批判へ

と変化しているともとれるのである。

このように魯庵は、肯定と否定（若しくは否定に近いもの）を並列し、関連させることで、より強烈に自分の主張を押し出そうとしているようである。

又、『やまと昭君』評に於ける「文字」へ趣向へ「主眼」等のように、小説を構成する個々の要素を取りあげて批評する際にも、賛賞するものを最初に述べ、順々に否定するものを並べていく方法をとることが比較的多いのである。これを見ても、魯庵が肯定と否定の組み合わせによって論を強める効果を計算していたのではないかと思えるのである。

但し、ここで注意しなければならないのは、必ずしも魯庵の意図どおりの強調が為されていないのではないかという点である。「戀山賤」「伽羅枕」など最もよい例である。肯定か否定か、下手をすると魯庵がどちらの立場で評を行っているかさえ曖昧になる場合があるのである。

しかし、何れにせよ、肯定、否定の示し方、評価の表し方には魯庵独特の特色があり、方法の特色の一つに数えても支障はあるまい。

以上、方法上の特色について述べたが、もう一つ考えなくてはならないのは、魯庵が評価の基準としていたものは何かということである。どのようなものを肯定し、又、否定していたか、を手がかりにして捉えていくことにしよう。

「南無阿彌陀佛」「戀山賤」評では、△脚色▽のすばらしさ、△着

眼▽の高さが肯定する理由として挙げられている。「京人形」を否定する主な理由として、△脚色▽が一貫していない点を指摘していたのと考えあわせれば、魯庵は△脚色▽というものを小説の重要な要素と考え、評価の視点にしていたと思われる。このことは、「京人形」評に於て「肝心なる脚色」という表現をしていることや、部分的に秀れていても作品全体としての一貫性がなければ「婉妙好辭をして死物たらしむる」と批評しているところにも現れている。

又、「色懺悔」評（其二）で、「シカシ『京人形』と違ひ全篇通徹して居る、ダカラ有がたし」と述べている辺りにも窺えるし、「南無阿彌陀佛」評で、△立案△脚色▽より△文字▽が優先し、△文字▽に全てが左右されている傾向を紅葉の「固有の病癖」と呼んでいることから理解できるのである。

又、「戀山賤」を肯定する理由として、△人情▽を穿っている点が挙げられている。△人情▽を穿つというのは、換言すれば、生きた人間を描き、美醜を問わず人間の本质を捉えるということである。『小説神髓』が出て以来、小説に於ける△人情▽というもののが急速に意識され始めたが、魯庵も小説を批評する視点の一つを△人情▽に置いていたようである。「京人形」評では、「京人形は美なる哉、艶なる哉、惜むらくは活動の精神に乏し」と生きた人物を描いていないことを指摘しているし、『此ぬし』評に於ても、俊橋、龍子共に「小説家の着目すべき好キャラクター」でありながら矛盾点が多いのは、「大人の御觀察足らずして徒らに其胸中より二箇の土人形を造出せしにあらざるか」と頭の中で考えた人物は人形に過



きないことを忠告し、「皮相の人情」を写して満足すべきでないこと批判している。又、『色懺悔』評（其二）では、「小説を編にはキヤラクターこそ肝心なり。此『色懺悔』には何れも此肝心なるキヤラクターを欲きしと覺ゆ。」と小説に於けるハキヤラクターの重要性を説いている。以上から考えても、魯庵が人物及びハ人情の捉え方や描き方を、批評の一つの視点とし、重んじていたと言えらる。生きた人間を捉えているか、美醜両面を兼ね備えた真のハ人情が描かれているか、即ち、これが評価の基準となるわけである。九篇のうち、全体的に見て否定されている「京人形」「色懺悔」「此ぬし」等は、何れもハ脚色或いはハ人情の描き方、人物の追求の仕方の不備を指摘されている。ハ脚色ハ人情が作品全体の評価に関わってくることを示すよい例であらう。

その他には、ハ趣向の纏まりの無さ、陳腐さ、ハ文章の無味等が否定的評価として挙げられている。このハ趣向やハ文章について、魯庵は「趣向を彼是申すはつまり第三流以下の言草」であると言ひ、ハ文章の巧みさは「一種の技能」であるが、それだけを取りあげて作品全体の評価とすることはできないと述べている。従って、小説の要素としてハ趣向やハ文章というものを、ハ脚色やハ人情の捉え方と比較すると、さほど重要とは考えていなかったらしい。このことは魯庵が『やまと昭君』や『伽羅枕』の文章の巧みさを認めながら、それが作品全体の評価に結びついていなかったことから判るのである。

以上、大要をおおまかであったが、魯庵が肯定、否定しているもの

をもとに、彼の評価の視点、基準をみてきた。それはハ脚色ハ人情の捉え方を小説の要素として重んじ、ハ文章やハ趣向等を第二として位置づけたものであった。つまり、ハ脚色が首尾一貫しているか、ハ人情を穿っているかが評価の重要な鍵であり、それによって肯定するか否定するかがほぼ決定されるわけなのである。

では少し視点を変えて、紅葉はこれら、ハ脚色ハ人情ハ趣向ハ文章といったものをどのように捉えていたのか、について考えたいと思う。が、十分検討する余裕がなかったので、ここでは岡保生氏の指摘を引用したいと思う。岡氏によると、紅葉が小説の「理論的支柱」を求めているのは『小説神髓』であったという。それならばハ人情を「主腦」とした作品をめざすはずであったが、紅葉が「ひたすら取り出した」のは『世態風俗』をいかに描くべきかという方法にすぎなかったし、『神髓』で説いているハ人情を描こうとして描いたのは「江戸時代以来の古風な『義理人情』の人情」であった。と、岡氏は紅葉が『神髓』に小説の「理論」を求めながら、その実作に於ては戯作を抜けきれなかったことを指摘している。又、紅葉は「平凡なる日常生活」の中に着眼すべき事柄を見出し、それを掘り下げる為に構成を練るということがなかった。一つのモチーフを見つけると初めからそのみに注目して、それを効果的に表わす為に「構想」していく「所謂趣向主義」をとっていた、と述べ、「場割をいくつか設定し、それを後でつないで行く」「いはば歌舞伎風の構成」であったと指摘している。従って、ハ人

情Vの捉え方にしても、作品構成のあり方にしても、△趣向Vに対する考え方にしても、紅葉と魯庵は一致するところが殆どなかった。紅葉の作品に対する姿勢は魯庵の評価の基準と逆行するものだったと言っている。その上に文才を駆使した美辞麗句の文章ばかりが目立った為、魯庵の批判的になりがちだったのである。

以上のように、魯庵は紅葉の作品に対してはほぼ否定的だったのであるが、この批評の視点や基準を、魯庵はどこから得たのであろうか。先にも触れたように『小説神髓』から学んだところもあったろうし、「書目十種」等で示されているように、ディケンズ、ツルゲーネフ、ドストエフスキ、ゾラ等外国文学の影響も受けていただろう。又、西鶴、京伝、近松、一丸、三馬、其磧等の古典から得たものもあったであろう。

しかし、何れにせよ、この視点や基準というものは魯庵自身の文学観、文学に対する意識に根ざしたものであることは間違いない。批評に現れる視点のおき方、評価のあり方はとりまなおさず、魯庵自身の文学意識の流出なのではあるまいか。△脚色Vの一貫性、△人情Vの追求に視点を置き、それを基準に評価を下すのは、魯庵自身がそれらに小説の主体、価値を見出していたために他ならなかったのである。

### 注記

- 1 『女學雜誌』132・134号。署名「不知庵主人」。  
2 この中には児童文学も含まれている。

- 3 『明治文學全集24内田魯庵集』昭53・3 筑摩書房  
4 『眞美人を評す』(『女雜學誌』137・138号 明21・11・12)。署名「不知庵主人」。  
5 『女學雜誌』164号、明22・6。署名「ふ、ち、」。  
6 『志がらみ草紙』4号。明23・1。署名「S.S.S.」。  
7 明25・1。博文館。署名「不知庵主人」。  
8 『新著百種の『色懺悔』』(『國民之友』明22・4) 署名「福洲學人」。  
9 明27・4。右文社。署名「三文字屋金平」。  
10 署名「A.B.C.」  
11 『女學雜誌』191号、明22・12。署名「M.M.」。  
12 同右。署名「楠仙子」。  
13 『女學雜誌』192・193号、明22・12。署名「不知庵主人」。  
14 署名「路功處士」。  
15 『女學雜誌』185号。署名「藤の屋」  
16 『國民新聞』明23・2・4。署名「廊下とんび」。  
17 『警告』と受けとるのは、常に魯庵の中に文学及び社会改造の意識が働いていたと考えるからである。『文學一斑』で「詩人の任」を「あらゆる宇宙の大問題を解かざるべからず」と捉えていた魯庵である。そこに警醒的な要素が含まれていたらとしても不思議ではなからう。
- 18 『文庫』19号、明21・4。「やまと昭君」壹の巻にある。  
19 『漣山人の『妹背貝』』(『女學雜誌』177号、明22・8)。署名

M 22・12 (単行)	「初時雨駿馬骨」 小説群芳第一 昌盛堂	尾崎紅葉
M 22・10	「戀山賤」 文庫 27号	
M 22・5 (単行)	「風雅娘」 新著百種 第3号 附録	
M 22・8 (単行)	「やまと昭君」 文庫 19~23号 吉岡書店	
M 21・4~7		
M 22・5~6	「南無阿彌陀佛」 百花園 1~4号 駸々堂	
M 23・1 (単行)		
M 22・4 (単行)	「二人比丘尼色懺悔」 新著百種 第1号	
M 22・9 (単行)	「風流京人形」 我樂多文庫 1~18号 新著叢詞 第1号	
M 21・5~6 M 22・3		
M 22・11	「紅葉山人の『戀山賤』」 女學雜誌 187号	内田魯庵
M 22・10	「近日出色の小説」 女學雜誌 184号	
M 22・9	「紅葉山人の『やまと昭君』」 女學雜誌 181号	
M 22・7	「紅葉山人の『南無阿彌陀佛』」 女學雜誌 170号	
M 22・4	「紅葉山の『色懺悔』」 女學雜誌 158~159号	
M 22・4	「紅葉山人の『風流京人形』」 女學雜誌 157号	

表 20 「不二山人」。  
(1) 「漣山人の『初紅葉』」(『女學雜誌』163号、明22・5)。署

名「ふ、ち」。  
21 「尾崎紅葉―その基礎的研究―」岡保生 昭28・4。東京堂。

M 24・10 (単行)	『幼年文學第1号 鬼桃太郎』 博文館	M 24・11	「鬼桃太郎」 國民之友 136号
M 23・7 } 9 M 24・10 (単行)	「伽羅枕」 江戸紫1号 春陽堂	M 24・11	「伽羅枕」 國民之友 136号
M 24・3 (単行)	『少年文學第2編 二人棕助』 博文館	M 24・4	「二人棕助」 國民新聞 4/17
M 23・9 (単行)	「此ぬし」 新作12番第2 春陽堂	M 23・10	「此ぬしに就いて」 國民新聞 10/2 } 3
M 23・1 M 23・9 (単行)	「拈華微笑」 國民之友 6の69号 新年附録 國民小説 1集 民友社	M 23・3	「紅葉山人の『拈華微笑』」 國民新聞 3/13

(昭和53年度卒業生、大阪教育大学大学院生)